

北区民まちづくり会議「人口減少部会」開催結果

1 日時

令和元年 6 月 25 日（火）午後 6 時 30 分～午後 8 時 30 分

2 場所

北区役所 3 階 会議室

3 出席者等

(1) 部会長

京都産業大学現代社会学部長 藤野 敦子 氏

(2) 出席者

地域代表者	2 人
北区民まちづくり会議委員	6 人
地域代表者推薦の地域の担い手（比較的若手の方）	3 人
各種地域団体	1 人
北区民まちづくり提案支援事業活用経験者	2 人
大学生	3 人
その他，社会課題解決等に取り組まれている団体等	6 人

（例：ボードレスハウス（国際交流シェアハウス運営団体），
京都市ソーシャルイノベーション研究所 等）

合計 41 人（行政職員を含む）

4 概要

ワールドカフェ方式（※）のワークショップを開催し，キーワード「次世代の子育て」「次世代の移住・定住」に対して，対象者（子育て世代，単身者，子どもなど）における課題や取組アイデアを検討した。

※ ワールドカフェ方式とは

「カフェ」のようなリラックスした雰囲気の中，少人数のテーブルで自由な対話を行う手法。他のテーブルに移動することにより，多様な意見に触れ，多くの取組アイデアを共有することが期待できる。

主な意見

(1) Aグループ

テーマ：「次世代の子育て」

対象者：子育て世代（乳幼児の保護者で、子育てに追われている人）

【課題】

- ・子育てをしているときは、遊びに行かせる余裕がなかった。
- ・母親同士のつながりは、保育園や児童館のつながりがあるぐらいだ。
- ・ちょっとした時間でも子どもを見てくれるところがあればと思う。そうすれば、地域の役に立つ心の余裕ができるかもしれない。
- ・地域とのかかわりのない親、つながりを求めない人をサポートする場が必要。
- ・北区は地価が高く、子育て世代が住むことは難しい。

【取組アイデア】

- ・育児中の親が利用できる「レスパイト・ケア」（代理機関や公的サービスが一時的に育児などを代替することにより、家族が休息を取れるようにする支援のこと）というサービスがあるが、京都では少ない。東京にはある。京都初として北区でできないか。
- ・子どもを1時間でも預かってくれると助かる。そんな場がたくさんあるといい。
- ・北区で生まれて大人になり帰ってくる人も多い。「北区ブランド」を全国的に発信するなどもっとPRすべき。
- ・つながりを求める人はどこへ行っても大丈夫。求めない人へのサポートが必要では。

(2) Bグループ

テーマ：「次世代の子育て」

対象者：単身者（20～40歳代で結婚や子どもについて考える人）

【課題】

- ・子どもを一人育てるのに2,000万円かかると聞いた。産む覚悟ができない。
- ・そもそも出会いがない。忙しいからという訳でもなく、自ら行動しない。何か後押ししてあげることが必要ではないか。
- ・女性が結婚に価値を見出せない時代になっている。フルタイムで働いている場合は特に結婚の必要性を感じない。
- ・生き方が多様化しており、結婚が当たり前という意識が変化している。

【取組アイデア】

- ・行政による教育費の助成があればよい。保育料だけでなく、小中高への支援が必要。
- ・人生は何とかなるという考え方もある。若者が、気軽に幅広い世代の大人と話せる機会を設けて、自然とそういう考えを伝えていければよいのではないか。
- ・楽只の再整備では、出会いの場を設けてはどうか。

(3) Cグループ

テーマ：「次世代の子育て」

対象者：子ども（小中高生で、北区で育つ人）

【課題】

- ・子どもが減っている学区もあり、クラスが少ないので友達関係に限られる。
- ・子どもに関わろうという大人が少なくなっている。
- ・小学校から不登校になる子どもも多く、小学生にも居場所が必要。また中高生の居場所が北区には少ない。
- ・大人が忙しすぎる。PTAに入らない親もいる。また小学生も塾や習い事で忙しく時間がない。

【取組アイデア】

- ・小学校合同で運動会を開催する。
- ・子どもたちの声（困っていること、欲しいもの、やりたいこと）を聞く機会を持つ。
- ・青少年活動センターをもっと知ってもらい、中高生に利用してもらう。
- ・子どもたちが地域に愛着を持ってもらう取組を行う。中学生に地域活動に興味を持ってもらい、参加してもらうことが大切である。
- ・大人が忙しすぎるので、働き方改革を進めていく必要がある。

(4) Dグループ

テーマ：「次世代の移住・定住」

対象者：若者世代（20～40歳代で、暮らす場所や家の購入などを考える人）

【課題】

- ・地価が高くて住めない。高級なイメージがある
- ・北区内には産業がない。大企業がない。仕事をする場所、子どもを預ける場所、暮らす場所のすべてが区内では完結しない。
- ・大学生は、大学1、2回生は北区にいても、3、4回生になると就活に便利な京都駅周辺の南の方へ引っ越してしまう。北区に定着しない。

【取組アイデア】

- ・北区で産業を生み出すために起業をしたい人が共同生活をするスペースや、コワーキングスペース（異業種の仕事を持つ人がオフィス環境を共有し、交流も図れる）を楽只の再整備区域に作ってはどうか。
- ・自分の住んでいるまちについて、歴史を学んだり、地域の活動に参加して地域の人とつながったりすることでまちにもっと愛着を感じてもらうことが、人を定着させるだけでなく新たな人を呼び込むのではないか。
- ・「光悦村」の歴史等を持つ北区で芸術文化の市（いち）を開催し、ブランド力を向上させて芸術家の移住につなげてはどうか。
- ・「北区に暮らすとこんないいことがある！」という生の声を発信する「北区住みよいまちPR隊」を組織して、生活に密着した魅力発信をしてはどうか。

(5) Eグループ

テーマ：「次世代の移住・定住」

対象者：大学生（大学生で、仕事・就職について考える人）

【課題】

- ・大学生には優しいが、社会人になって「住む」となると「イケズ」のイメージがあつてハードルが高いのではないか。
- ・北区に本社がある企業はほとんどなく、就職を考える北区の大学生住むのは中京区や下京区になる。
- ・子育ては大変。地域にサポートできる場所があればよいのではないか。

【取組アイデア】

- ・地域のお祭りにゼミ単位で学生に準備から参加してもらい、時間を共有する。顔の見える関係ができれば、住みたいと思う学生も出てくるはず。また学生のうちにそんな経験をすれば社会人になっても活かせる力が身につくのではないか。
- ・シェアハウスで、若手社会人と学生が同居してはどうか。就活で不安なことなども相談でき、具体的な社会人のイメージも湧きやすいのではないか。
- ・「何があつてもここがある」とすがれる場所があれば、子育ては何とかなる。楽只市営住宅の跡地に作ってはどうか。

(6) Fグループ

テーマ：「次世代の移住・定住」

対象者：移住者（北山三学区など田舎への移住を考える人）

【課題】

- ・学校がない、又は遠いために、子どもが学齢期になったときにどうするかが課題。
- ・交通の便が悪く、バスの定期代がかなり高額になる。
- ・山間部の住民が移住者に来てほしいと思っていることが分かりづらい。

【取組アイデア】

- ・他県では、受け入れ活動をしておりIターンで来られる人も出てきている。北部山間部も良いところのPRや住居の提供などで周知するとよい。
- ・移住者が慣れるまで、町内会を紹介するなど、行政のサポートが大切である。
- ・学校のキャンプなどの体験活動で、子どもと地域が交流し、山間部の魅力を知ってもらう。

(7) Gグループ

テーマ：「次世代の移住・定住」

対象者：外国人（北区での移住・定住を考える人）

【課題】

- ・短期に移転する人は、自治会に加入することも少なく、地域とのつながりが薄い。どうせ短期で出ていくから自治会に入っても自治会側が迷惑するだろうと思っているかもしれない。そもそも自治会の存在を知らないこともあるだろう。
- ・自治会側は短期の加入者でも歓迎だが、それが伝わっていないかもしれない。アピールの仕方が大切だが、最近はオートロックのマンションが多く、大きな障壁である。

【取組アイデア】

- ・自治会に誘われても、知らない人から誘われると入ってよいものか戸惑う。学生ならば大学を通じてとか、先輩を通じてとか、知っている人・信用できる人から誘われれば入りやすい。むやみに勧誘するのではなく、キーパーソンを作る必要がある。
- ・地域との関係がうまくいっていれば、住民が魅力的なまちとしてSNSで発信してくれ、口コミ効果で移住者が増える好循環が生まれている例もある。
- ・外国人は日本の生活に不慣れで不安に思っている。困りごとに対応してくれる人、行政手続きなどをアテンドしてくれる人がいると助かる。ここに行けば、相談に乗ってくれる人がいるというような交流所、案内所、ハブのような場所があるとよい。

5 部会長のまとめ

本日の部会では、2つのキーワードが見えてきた。

1つは、「交流」「繋がり」「コミュニケーション」といった人と人との関係性である。新しい時代において、新しい関係性をどう再構築していけるかが鍵になる。

もう1つは、「多様性」をどう共有し、アピールしていくかである。北山三学区のように、北区にも多様性があるということが見えてきたのではないかな。

次期北区基本計画の策定に向けて、この2点を基軸に進めていければと思う。

6 部会の様子



北区民まちづくり会議「防災部会」開催結果

1 日時

令和元年6月26日（水）午後6時30分～午後8時30分

2 場所

北区役所3階 会議室

3 参加者等

（1）部会長

佛教大学保健医療技術学部教授 松岡 千代 氏

（2）出席者

地域代表者	4人
北区民まちづくり会議委員	4人
地域代表者推薦の地域の担い手（比較的若手の方）	5人
各種地域団体	3人
北区民まちづくり提案支援事業活用経験者	3人
大学生	5人
災害時の避難弱者と関わりの深い団体等	7人

（例：紫野地域包括支援センター、京都ライトハウス、京都手をつなぐ育成会北支部）

社会課題解決等に取り組まれている団体（パトラン京都）	1人
----------------------------	----

合計 49人（行政職員を含む）

4 概要

キーワード「地域防災」に対して、対象者（高齢者、障害者・難病患者、妊婦・子育て世帯など）における課題や取組アイデアを検討した。

主な意見

※下線部が中心的に扱ったテーマ

(1) Aグループ

対象者：高齡者、障害者・難病患者、妊婦・子育て世帯

【課題】

- ・高齡者の情報は地域がある程度つかんでいるが、障害者は把握できていない。医療機関や行政等は個人情報や地域に流せないため、把握が難しい。
- ・高齡者の中には避難情報や避難場所などを正確に理解していない人もいる。
- ・単身の高齡者は日常的にコミュニケーションをとれる相手がいないことも多い。災害時にはそのような人の避難も課題になるのではないか。

【取組アイデア】

- ・いざ避難となった時には、向こう三軒両隣でいかに助け合えるかが最大のポイント。町内会長が情報を持っていたとしても、距離的に離れていてあまり意味がない。日頃からの隣近所の付き合いが重要だ。
- ・単身の高齡者世帯を対象とした、大学生による話し相手のボランティアがあれば、高齡者に喜ばれるし、世帯状況等の把握にもつながるのではないか。
- ・避難途中の怪我や避難所での発病に備えて、多種多様の薬剤をあらかじめ用意しておけば、少しでも安心安全な避難所生活になるのではないか。
- ・楽只市営住宅の団地再生で防災拠点を設置し、物資を備蓄したり、観光客や外国人も避難できる場所にしてはどうか。

(2) Bグループ

対象者：障害者・難病患者、妊婦・子育て世帯、大学生

【課題】

- ・障害が原因でコミュニケーションを取りづらい方もおられる。そのために避難所に行くことが難しい場合や、防災訓練に参加できていない場合もある。
- ・要介護状態の高齡者は障害者と状況が比較的似ているかもしれないが、高齡者は介護保険など、制度が充実しており、災害時はケアマネジャーなどが安否確認等をしてくれるだろう。
- ・親が関わっている若年の障害者は、いずれ親の高齡化という現実と直面する。親が関われなくなったときにどうするのが課題。近所が見守るしかないのではないか。一方で障害者世帯は近所との交流が少ないことも課題。
- ・若年齢層の障害者はネットワークがあるが、高年齢層の障害者は家族以外のつながりがないことが多く、家から出ないか、家と職場の往復になりがちである。
- ・地域で障害者について話し合いを持つ場がない。
- ・障害者を対象とした福祉避難所は、一般避難所へ避難した後、トリアージ（患者の重症

度に基づいて、治療の優先度を決定して選別を行うこと)を経て移送することとなっているため、直接避難することができない。

- ・一般避難所では、障害の内容によっては、通常よりも広いスペースを必要とする場合等が考えられ、同じスペースで障害者同士が生活することが困難な場合がある。
- ・避難所での障害者受け入れを考えると、障害者と接するときの基礎的な知識が運営側に不足している。

【取組アイデア】

- ・障害者が、(一般避難所にいったん避難してからではなく)直接避難できる施設が必要ではないか。
- ・地域包括支援センターの地域ケア会議は高齢者のケアを想定して設けられているが、障害者を対象とした同様の会議があればいい。
- ・子どものときから障害者に対する理解を深めていく必要がある。

(3) Cグループ

対象者：妊婦・子育て世帯，大学生，外国人

【課題】

- ・避難所に乳児用のミルクや紙オムツや、幼児・児童の遊び場があるのか心配。
- ・避難の際、重たい防災グッズを持ち、子どもを連れて避難できるのか不安。
- ・助け合える普段の顔の見える関係性が築けていない。助ける人の登録はなかなか難しい。
- ・避難情報が伝わっていない。

【取組アイデア】

- ・ある学区では、要配慮者を登録している。妊婦も登録の対象にしてはどうか。
- ・母子手帳取得の段階で、本人の了承を得た上で、情報を地域に知らせてはどうか。
- ・大学生に避難所での戦力として活動してもらえるよう、大学での勉強(救急救命講習など)と意識付けをしてもらい、思いのある学生に登録してもらうようにしてはどうか。
- ・助ける側の人員が足りていない。中学生が戦力になるのではないか。

(4) Dグループ

対象者：大学生，外国人，山間地に住む人

【課題】

- ・住民票を移していない学生が多いため、行政の避難者名簿に挙がらず本人の安否確認ができない。
- ・地域の避難場所に避難してきた大学生のマナーが非常に悪かったということがあった。
- ・同年代だけで固まって活動しがちで、地域との接点がない学生が多い。

【取組アイデア】

- ・大学は既に、学生の安否確認システムを持っている。緊急時は必要な情報を同システムで共有できるとよい。
- ・避難所の場所、避難行動の仕方、避難場所での気を付けるマナーなどをわかりやすく発信する必要がある。
- ・地藏盆、地域のお祭りなどの地域行事に参加したり、老人会や地域の会合・懇親会に来てもらい、芸や演奏を披露してもらう。

(5) Eグループ

対象者：外国人，障害者・難病患者，その他（ペット同行者，マンション住民など）

【課題】

- ・外国人は、言葉の問題があり、コミュニケーションが取りづらい。避難所生活でも、言葉の壁が大きな課題になる。
- ・外国人であっても、いかに地域とのつながりをもってもらうかが基本。特に単身者は孤立しがち。

【取組アイデア】

- ・災害はいつ起こるか分からない。どこに、いつ避難すればよいか分かるように、避難先については、誰もが分かるサインをまちのあちらこちらに設けるべき。
- ・障害の内容も様々である。例えば、聴覚障害者向けに、避難所での情報のサイン表示や、駅等における電光掲示版での表示も大切である。
- ・楽只市営住宅の再整備について、外国人観光客が訪れたいと思える仕掛けが重要である。例えば北区ならではの「食」や「伝統産業」をテーマにできないか。

(6) Fグループ

対象者：山間地に住む人，高齢者，その他（ペット同行者，マンション住民など）

【課題】

- ・避難情報が、実際の肌感覚と合わない。避難所への一歩が踏み出しにくい。
- ・川が近いと増水して氾濫することがある。高齢者の多くが避難所に行くのが難しいこともある。
- ・普段からの地域との交流が大事ということは頭では分かっているが、実際の地域への入り方が分からないという声がある。
- ・サイクリストに人気があるなど、魅力はあるのだがそれを発信していく力がない。

【取組アイデア】

- ・近所にどんな人が住んでいるのかを知っておく（持病や家族構成など）。知っていれば、助けに行ったり、避難所に行くときに声掛けできるかもしれない。
- ・住んでいる人の多くは、自分が居住している学区を意識していない。実態に即して、学区にとらわれずどこの避難場所にいてもよいことにしてもいいのではないか。
- ・発信力がないという課題に対しては、北区のコミュニティラジオ局「ラジオミックス 京都」を活用してはどうか。

5 部会の様子



北区民まちづくり会議「高齢化部会」開催結果

1 日時

令和元年8月28日（水）午後6時30分～午後8時40分

2 場所

北区役所3階 大会議室

3 参加者等

（1）部会長

大谷大学社会学部長 志藤 修史 氏

（2）出席者

地域代表者	6人
北区民まちづくり会議委員	6人
地域代表者推薦の地域の担い手（比較的若手の方）	3人
各種地域団体	4人
北区民まちづくり提案支援事業活用経験者	3人
大学生	15人
その他、高齢者との関わりが深い団体 等	8人
（例：北区民生児童委員，京都市老人福祉委員， 地域包括支援センター，北区社会福祉協議会）	

合計 69人（行政職員を含む）

4 概要

ワールドカフェ方式（※）のワークショップを開催し，キーワード「いつまでも健康でいきいきと暮らせるまち」「地域で繋がりが合い，互いに支え合えるまち」に対して，対象者（勤労世代，シルバー世代，大学生，後期高齢者など）にとっての「理想のまち」や，実現していくための取組アイデアについて議論した。

※ ワールドカフェ方式とは

「カフェ」のようなリラックスした雰囲気の中，少人数のテーブルで自由な対話を行う手法。他のテーブルに移動することにより，多様な意見に触れ，多くの取組アイデアを共有することが期待できる。

主な意見

(1) Aグループ

テーマ：いつまでも健康でいきいきと暮らせるまち

対象者：勤労世代（40～60 歳代で、健康を意識し始める世代）

【理想のまち】

- ・地域の人と趣味やスポーツで世代を超えてつながり、老後一人ぼっちにならない。それによって体だけでなく心の健康も保つことができる。
- ・日常生活の中で気軽に運動ができるような施設があれば、いつまでも健康でいられる。
- ・児童公園に大人も利用できる器具があり、世代間の交流ができればよい。
- ・自分の健康だけでなく、まちもきれいであれば健やかに暮らせそう。

【取組アイデア】

- ・地域で趣味が合う人を見つけることが大切。地域のイベントが出会いの場になるので、積極的な参加を促していく。
- ・地域イベントに参加してもらうためには、面白い仕掛けであったり、働き盛り世代に配慮して子どもと一緒に参加できるようにするなどの工夫が必要。
- ・（次世代の担い手を育てる観点から）地域行事の企画は若い人に任せて、何かあれば主催者で責任を取ってあげることが大切。また、できる限り緩やかに関われる雰囲気づくりをすることが多様な人材の参加につながる。
- ・地域の役をきっかけにつながりができることは事実なので、面倒でも役をやることが大切。会社組織とは違い、役職のしがらみがないので楽しむこともできる。
- ・児童公園に子どもだけでなく、大人も利用できる器具を置き、世代間の交流を促す。
- ・女性に比べて男性はつながりづくりが苦手な傾向にある。例えば、ママ友を利用して、男性同士のつながりができるような工夫をすることが必要ではないか。

(2) Bグループ

テーマ：いつまでも健康でいきいきと暮らせるまち

対象者：シルバー世代（60～70 歳代で、健康を意識する世代）

【理想のまち】

- ・定年を迎えても社会から離れることがないように、歩いて出かけられ、楽しくおしゃべりできる場所があるまち。
- ・出かけたくなるまち、出かけるきっかけになるような新しいモノやコトがあるまち。
- ・高齢者が生活の不自由を感じることがないように、食料など日々の必需品を購入するための店や、医療機関は必要だ。

【取組アイデア】

- ・公園や銭湯，集会所，図書館，カフェ，学校，神社仏閣等の気軽に人が集える場所を活用し，そこを中心にまちづくりを行う。
- ・大学生が集まる場があれば，連携もしやすい。楽只市営住宅の跡地にラウンドワンのような遊戯施設や映画館など，若い人が集まる場所があればよい。
- ・公園に集まるだけではなく，活性化する仕掛けが必要。例えば集う場所に畑を作り，そこで野菜を育て，売るなどしてはどうか。
- ・街中に出かけるきっかけづくりとなるような取組を行う（ハッピーアワー（安くお酒が飲めるなど），朝市，グラウンドゴルフ，歩こう会などの趣味を生かしたイベント など）。
- ・男性は目的がないと孤立しやすい。また，奥さんに連れられてでないと動かない人もいる。祭りで神輿を担ぐために自治会へ加入するなど，地域に関わるきっかけを提供する，地域の商店街等とコラボし，ペア割（2人で120才オーバーの場合，〇円引きなどの特典があるなど）を始めるなど。
- ・「スマホの使い方講座」の開催，60才代以上の人も楽しめるスマホマップの作成などにより，集える場所の情報共有をする。

（3）Cグループ

テーマ：いつまでも健康でいきいきと暮らせるまち

対象者：北山三学区（山間地で暮らす高齢者）

【理想のまち】

- ・車の運転が出来なくなったり，足が不自由になっても自由に移動ができ，みんなが集まれるまち。
- ・山間地から市街地に出かけられ，外からも人が来るまち。そのためには特産品を扱う店があり，そこで高齢者が働くことができたり，若い人が移住して事業を始めるような環境が必要。
- ・孤立せず，日常的な交流があり，集って一緒に食事ができるようなまち。
- ・地域に小学校があって子どもが多く，高齢者と交流できるまち。
- ・バスが増便され，市街地へ出かけやすいまち。化粧やおしゃれをしてのお出かけや趣味など，気持ちの張りがあることは大切。

【取組アイデア】

- ・交通の便を良くする（雲ヶ畑もくもく号の増便。専門医のいる病院を誘致し，病院の送迎バスに地元の人でも乗れるようにする。山間三学区で共有の自動車を持ち，ローテーションで利用する。地域の人同士が「乗り合える」「乗せ合える」ソフト面の取組など）。
- ・市街化調整区域や上下水道などの問題はあがるが，キャンプ場やバーベキュー場など，外から人が来るような施設を建設し，地域の人でも利用しやすいようにする。

- ・休校中の学校を活用し、フリースクールを誘致する。職員寮を設置して地域になじんでもらい、移住につなげる。また土日や夏休み期間中に開放し、野草を食べるなどサバイバル教室を開催して、親子に山間部ならではの良さを理解してもらう。
- ・住むためには産業、働く場所が必要。地域ならではの手づくりの品を活かすことができないだろうか。
- ・女性に自治会の役員を積極的に務めて活躍してもらい、女性が住みやすいまちにすることで女性が増えれば、地域が活性化するのではないか。

(4) Dグループ

テーマ：地域で繋がり合い、互いに支え合えるまち

対象者：大学生（健康や福祉について大学で学び、社会に還元できる人）

【理想のまち】

- ・大学生が大学・家・アルバイト先を直線的に行き来するのではなく、「4番目の場所」として地域とつながっているまち。
- ・地域の人とごく自然に挨拶したり話せるまち。
- ・年齢や属性、障害のあるなしに関わらず、誰もがまちの構成員であり、多様な人を認めあうことのできるまち。

【取組アイデア】

- ・インスタ映えするメニューのあるカフェ、スポーツや趣味の場など、学生がわざわざ寄り道したくなるような場所があれば、地域と接点を持つきっかけをつくることにつながるのではないか。
- ・大学から地域に向けて発信するための掲示板があれば、「地域のイベントで演奏します」などを周知でき、地域とのつながりも生まれるかもしれない。
- ・大学生が、知らない人に声を掛けやすくする仕掛けを考えてはどうか。例えばコミュニケーションカードを作って「何か困っていることはないですか」と声を掛ければ、何人かに一人は困りごとを抱えている人が反応するのではないか。
- ・一人ではできないことでも、人が集まればできる。学生だけでは難しくても、地域と連携すればできる。そのためには地域の窓口を明確にするなどの仕組みづくりが必要ではないか。地域と大学で「双方向」「出入り自由」な関係・場があればよい。

(5) Eグループ

テーマ：地域で繋がり合い、互いに支え合えるまち

対象者：介護世代（40～60歳代で、親の介護をしている又はこれからする世代）

【理想のまち】

- ・隣近所の人に、気兼ねなく相談やお願いができるまち。
 - ・子ども（若者）が高齢者をお手伝いする仕組みがあるまち。
- そのためには、40～60歳代に心の余裕が必要ではないか。

【取組アイデア】

- ・子どもだけではなく、多世代が集い食事しながら交流できる「みんな食堂」の開催。
- ・各種団体の世代交代が進んでいない。世代交代しやすい仕組みづくりが必要。
- ・70歳代になって初めて地域活動をして、分からないことが多く、動けない。忙しくても40歳代で一度は経験を積んでおくべきだ。
- ・介護サービスなどが充実していても、活用しづらい高齢者もいる。実際に施設でサービスを経験してもらうことで心地良さに気づいてもらうなど、専門職がサービスを受ける方の立場に立って、きめ細かな配慮をすることも必要。
- ・近所の人との気持ちの共有を図るために、いろいろな世代が気軽に集まることのできる空き家を活用した場、盆踊りなど既存の自治会イベントを活用した場を提供する。
- ・アメリカでは、親のボランティア活動の実践度が、子どもの進学で評価される仕組みがある。そうした点に注目して、制度を作ることも考えられるのではないか。
- ・地域の役員同士が連携する仕組みが大切だが、忙しい人が多く、顔を合わせる機会を持つことが難しい。スマホ等をはじめとしたICT技術で解決できるのではないか。

(6) Fグループ

テーマ：地域で繋がり合い、互いに支え合えるまち

対象者：後期高齢者（75歳以上で、要介護認定を受けている世代）

【理想のまち】

- ・それぞれの人の力が活かされる。
- ・気軽に外出できて、外で人とつながることにより元気をもらえる。
- ・まちの中で困っていても周りの人とつながりあえる。
- ・鴨川で花見をしたり、行きたいと思える場所があり、皆で楽しめる。

【取組アイデア】

- ・様々な高齢者等が集えるカフェを設置。参加している人は、参加できない高齢者を訪問し、話を聞く機会をつくる。
- ・大人も楽しめるような地蔵盆を開催する。
- ・まちが支えるためには、顔の見える関係を作る必要がある。昔は当たり前だったことをどう復活させるかが大切。
- ・大学生が交流する「飲み会」のような場が地域でもあれば、学生も参加しやすい。
- ・大学の学食に高齢者を招待する、地域の人を大学に呼んで「地域コーナー」を設置するなど、大学と地域の高齢者との接点を作る。
- ・楽只市営住宅の跡地のにぎわい施設に地域と学生が交流できるような実習室を作る。

(7) Gグループ

テーマ：地域で繋がり合い、互いに支え合えるまち

対象者：その他（地域との繋がりを持つことが期待される人 例：外国人、障害のある人など）

【理想のまち】

- ・外国人も障害のある人も、みんなで美味しいものを持ち寄って交流できるような、自然に距離を近づけられるようなまち。
- ・外国人に日本の文化を、外国人からは自国の文化を紹介してもらい、文化交流が盛んなまち。
- ・昔は子どもが外で友達と遊んでいたが、最近は子どもを見掛けない。通りで子どもが花火をしているなど、子どもの声が聞こえるまち。
- ・介護保険制度など、以前より制度が整っているがために、地域が要支援者を気にする必要が薄れてしまった。自然なかたちで地域とつながりを持ち続けられるまち。
- ・一人で要支援者を抱えている人など、社会で孤立しやすい人が地域とつながりを持ちやすいまち。

【取組アイデア】

- ・様々な地域団体の持つ情報を共有し、つなぐ仕組みを作る。個人情報のある壁はあるが、緩やかな情報の共有により、心配な人、見守る人を地域とつなぐことができればいい。
- ・町内会で役をやっていると負担が重い。大学生が地蔵盆で子どもとゲーム大会をするなどすれば、町内会活動の負担軽減にもつながるのではないかと。町内会に入らない人に対しては、無形の利益、安心感が町内会に入るメリットであるということを理解してほしい。
- ・人が集まる場をわざわざ新しく作るのではなく、小学校、大学、銭湯など既存の場所に、地域の様々な人が集えるよう工夫する。

- ・高齢者は、若い人と話をすると刺激を受ける。最近みた映画や昔の思い出、自分の得意なことの話になり、若返る。実際に高齢者の話であきらめかけた夢を再び追い始めた若者がいて、その高齢者が大変に喜んだという事例もある。
- ・高齢者がボランティアをしてもらうばかりではなく、演奏を披露するなどボランティアをする側になってもよい。
- ・例えば「北区民文化フェスティバル」で課題曲を1つ決めて、高齢者、若い人、障害者など様々な人が集うチームをつくりチーム対抗歌合戦をするなど、多世代が交流できる場があってもよい。

5 部会長のまとめ

本日は、皆が参加できる仕掛けをどれだけ作れるのかが大切という意見が出た。

来年は東京オリンピックが開催される。オリンピックの理念として、「not to win, but to take part（勝つためではなく参加する（ことに意義がある））」という言葉がよく知られているが、同じようなことが市民参加でも言えるのではないか。改めて「take part（参加する）」ということについて、各々で考えていくことが大切である。

次に、北区は文化と学びの地域であるという意見も出た。例えば、小学校も活用しながら、北区18学区それぞれの持ち味を生かした体験・交流と学びの機会があるのも面白いのではないか。

私が行った調査でも、日常的に近隣と交流したり、身近に相談できる人がいるということが、心身の健康につながるとの結果が出ている。皆が参加できる取組がまちのそこかしこに見られる。そうしたことが、ひいては「健康」にもつながっていくのではないか。

6 部会の様子



北区民まちづくり会議「文化・観光部会」開催結果

1 日時

令和元年9月2日（月）午後6時30分～午後8時30分

2 場所

北区役所3階 大会議室

3 参加者等

（1）部会長

立命館大学准教授 河角 直美 氏

（2）出席者

地域代表者	7人
北区民まちづくり会議委員	3人
地域代表者推薦の地域の担い手（比較的若手の方）	2人
各種地域団体	3人
北区民まちづくり提案支援事業活用経験者	1人
大学生	5人
その他、伝統芸能関係、織物関係、観光関係、寺社仏閣関係 の団体・個人	10人
（例：観世流能楽師、(株)福田喜、(株)龍村光峯、茶道速水流、 (株)らくたび、今宮神社、大徳寺）	

合計 55人（行政職員を含む）

4 概要

京都産業大学文化学部 村上教授から「生活文化と地域」をテーマにお話いただいた後、ワークショップ1として「北区の生活文化ってどんなもの？（過去～現在）」をテーマに、グループごとに自分の住んでいる地域を基点に“生活文化”を出し合った。

その後、時代が変化しても、生活の中に文化が息づく“しかけ”を模索するため、ワークショップ2として「未来の暮らしにも生活文化を！（現在～未来）」をテーマに話し合った。具体的には、ワークショップ1で抽出した「生活文化」や「伝統芸能」を通じて、「地域をつなぐためにできること（地域コミュニティ）」及び「地域を元気にするためにできること（観光）」についての取組アイデアについて検討した。

主な意見

(1) Aグループ

テーマ：生活文化と伝統芸能で、地域をつなぐためにできること

【身近な生活文化とは】

- ・個人商店・・・昔はどこでも魚屋，八百屋，駄菓子屋とそれぞれの商店があったが，今はスーパーで足りるようになった。便利になった反面，店の人や隣近所との付き合いは薄れてしまった。
- ・幸在祭（さんやれさい）・・・上賀茂神社・大田神社に15歳の元服を報告する。
- ・千度参り・・・年に1～2度，町内の人が集まって疫病が流行しないよう祈念する。
- ・銭湯・・・地域の人とのコミュニケーションの場にもなっている。
- ・その他，やすらい祭（今宮神社），地藏盆，メンコ遊び，納豆餅，松上げ，茶文化，野菜の振り売り，盆送り（千本えんま堂）等々
- ・学生に優しい・・・学割のある店が多い，地域の人が学生に温かいなど。
- ・障害者に優しい・・・元町学区では障害者施設や支援活動をしているNPO法人が多い。
- ・西陣工房など，伝統工芸で障害者雇用を行っているところもある。
- ・各学区の居場所づくり活動は，100年続けば文化になる。
- ・北区民ふれあいまつり・ふれあい発表会，FUNAOKA STANDARD（フナオカスタンダード）などのイベント

【地域をつなぐためにできること】

- ・「裏を往く」（平成30年度に北区役所改革実践チームが作成した北区の魅力を伝える冊子）で取り上げたような「住民でも知らない，知る人ぞ知る」という情報を掘り起こし，多くの人に伝えることが必要だ。
- ・情報をもとにして，人や物が動く仕組みを作りたいと思っている。例えば，障害者が作った物を観光客が手に取ってくれるなど。人とつながることによって，誰かが楽になるような仕組みとなれば。
- ・昔は神社の境内が交流の場だった。神社が変わったわけではなく，地域の方から離れていったのだと思う。
- ・しっかりした祭りが地域に残っているところは，子どもを地域で見守る環境を保っていることが多いのではないか。
- ・子ども自身が参加したくなるようなイベントでないと，習い事や塾で忙しい現代の子どもは参加しない。宿題を一緒にするなどの工夫をしていくことも必要ではないか。

(2) Bグループ

テーマ：生活文化と伝統芸能で、地域を元気にするためにできること

【身近な生活文化とは】

食

- ・すぐき、焼きもちが生活の中に普通にある。
- ・正月にお雑煮ではなく、納豆餅を食べる。かつては納豆も自家製で作っていた。
- ・白みそ雑煮、京野菜の振り売り、パンとコーヒー（コーヒー屋さんが多い）。

お祭り

- ・葵祭、上賀茂神社の賀茂競馬
- ・今宮神社のやすらい祭り、あぶり餅
- ・建勲神社の船岡大祭
- ・地蔵盆、春祭り、秋祭り、区民運動会
- ・寺社仏閣等の手作り市が多い

スポーツ

- ・山が近く、ロードバイク乗りには素晴らしい環境がある。
- ・大文字駅伝。市民にはお馴染みで応援も迫力があり、冬の風物詩となっている。

伝統工芸

- ・工房見学を積極的に開催し、単なる体験教室ではなく、機織り機に触れ、ありのままを楽しんでもらえるような体験会を開催している。

環境

- ・市の中心部と比較すると公園が多く、緑豊かな環境がある。大宮交通公園のような大きな公園や、賀茂川河川敷といった自然が身近にある。

【地域を元気にするためにできること】

- ・京見峠の湧き水や雲ヶ畑の鴨川源流など、水資源の豊富さを活用できないか。
- ・例えば「〇〇さん家のお雑煮」など、京都ならではの食文化を学べる体験会。
- ・地蔵盆をはじめ、地域に息づく行事に参加を促す工夫。フリーペーパーで広報するなど。

(3) Cグループ

テーマ：生活文化と伝統芸能で、地域をつなぐためにできること

【身近な生活文化とは】

- ・山間部における、畑や山での作業協力
- ・食事や野菜のおすそ分けをはじめとした近所の人との交流
- ・松上げ、お火焚き、地藏盆
- ・昔ながらの商店街から、若者向けの新しい店もある。
- ・四季折々の家屋等のしつらえ。
- ・お祭りの際に各家庭で用意した鯖寿司、おはぎ、ぼた餅。
- ・白みそ雑煮、羽二重餅、亥の子餅。
- ・大学が多いため、学術関係者や知識人が多く住む風土。
- ・北山杉、北山丸太、北山台杉。
- ・学区ごとの夏祭り。
- ・「水」と縁が深い生活（京見峠や上賀茂神社の湧き水）

【地域をつなぐためにできること】

- ・お寺で花見やバーベキュー、お月見を開催し、地域の交流の場にする。
- ・外国人、留学生、大学生が参加できる、新しい送り火や地藏盆を開催する。
- ・北区産の野菜を売りに行くことができる、道の駅・里の駅のような「まちの駅」があれば、交流も生まれる場所になるのではないかな。
- ・空き家を文化資源として活用する。
- ・例えば、西陣織と自動車メーカーがコラボレーションして、カーボンファイバーで西陣織を織るなど、伝統技術を新素材に活用して新たな商品を生み出す。
- ・北山杉の端材を活かしたお土産づくり。
- ・北区の野菜を使った「持ち寄りご飯会」。
- ・自転車の観光コースを設定し、国内外に発信する。

(4) Dグループ

テーマ：生活文化と伝統芸能で、地域をつなぐためにできること

【身近な生活文化とは】

- ・ 8月16日に左大文字に護摩木を納めに行く。伝統行事が身近に感じられる。
- ・ 托鉢の修行僧の声が聞こえる。
- ・ 区民運動会で本気で頑張る。
- ・ 尺八や琴のけいこ場が身近にある。
- ・ ご飯を食べるときに必ず漬物を食べる。賀茂のすぐきは京都が誇る最高品だ。
- ・ おいしいパン屋さんが多い。京都の人は3軒ぐらい行きつけのパン屋さんを持っており、その時の気分や用途で使い分けている。
- ・ 新しい食べ物や様々なジャンルの店ができて、良いものであればそれを受け入れる文化がある。
- ・ 犬矢来、垣根など、昔からの京都らしいものが残っている。

【地域をつなぐためにできること】

- ・ アピール不足。例えば東京都港区のように、ブランド化できるいいものがたくさんある。それらをもっとPRして北区ブランドを確立すべき。
- ・ 建勲神社の刀はアニメ「刀剣乱舞」でモデルとして取り上げられている。船岡山を聖地巡礼先としてもっと盛り上げられないか。
- ・ よい素材はたくさんあるが、それらを一覧できるマップがない。パン屋さんや食文化の情報を落とし込んだり、区民目線の辛口コメントをつけたりしても面白いものができるのではないか。
- ・ 楽只市営住宅は立地的に金閣寺と上賀茂神社の間に位置している。外国人向けのインフォメーションセンターにして、北区の文化が一目でわかるようにしてはどうか。

(5) Eグループ

テーマ：生活文化と伝統芸能で、地域を元気にするためにできること

【身近な生活文化とは】

- ・ 銭湯
- ・ 表具屋
- ・ おすそ分けなど近所とのコミュニケーション
- ・ 川での金魚すくい
- ・ 納豆餅
- ・ 結婚のときのお嫁さん披露
- ・ ラジオミックス京都

【地域を元気にするためにできること】

- ・ 楽只市営住宅の再整備において、1階を商業施設、2階を北区役所、3階を24時間の託児施設としてはどうか。
- ・ 北区の特産品を巡るツアーや、道の駅や商業施設などに集約された場をつくる。
- ・ 北区サイクリングコース「キタイチ」を考案する。

(6) Fグループ

テーマ：生活文化と伝統芸能で、地域をつなぐためにできること

【身近な生活文化とは】

- ・ 銭湯が今も比較的多く残っている。
- ・ 商店街、特に個人商店が比較的元気なところが多い。
- ・ お祭りや四季折々の行事が多くある。
- ・ 子どもたちに地域の畑を使って農業を教えている。
- ・ しめ縄飾りを焼く「どんと焼き」を行っている。
- ・ 精霊流し、おしょうらいさん、大根炊き、明神川の灯籠、北山杉の磨き砂等々

【地域をつなぐためにできること】

- ・ まずは知り、興味を持ってもらうことが大切。経験していいと思えるものが後世に残り、文化となる。本来文化は固定的なものではなく、移ろいゆくものである。
- ・ 様々なことが移ろい、変わっていくが、根っこにあるものがどれだけ共有できるか。
- ・ 「知る」「いいなと思う」「好きになる」。そういった経験が個人のアイデンティティとなり、やがて個人でなく地域のつながりに広がっていく。
- ・ 特に子供が様々なことを経験する機会を大人がどれだけ作ることができるか。そのためには、学校の教員もその地域にある文化を知っておく必要がある。
- ・ お米はスーパーで売っているが、稲穂から脱穀した後のわらを使ったわら細工のよう

に、自然の恵みを最後まで使い切るということを、地域の人が小学校で教えている例がある。

- ・商店街活性化に大学生が関わっている事例のように、学生が地域をつなぐキーマンになると思う。

5 部会長のまとめ

本日の部会では、非常に活発な意見交換ができた。そのこと自体がすばらしく、大切なことだと思う。

あるテーブルでは、次の世代への伝え方についての意見も出ていた。北区で長く住んでいて知っていることや新たに見つけたものなどをお互いに伝えられる拠点、情報誌などの活用である。また、私自身の意見だが、京野菜（賀茂なす等）は北区がもっと誇ってもよいものではないか。平安時代頃から作られてきている歴史があり、京都の中心部にはないものである。

何よりも、お互いに理解し合いながら、次の世代に文化を伝えられればと思う。

6 部会の様子



北区民まちづくり会議「共同部会」（１日目）開催結果

1 日時

令和元年 12 月 17 日（火）午後 6 時 30 分～8 時 45 分頃

2 場所

大谷大学 尋源館（じんげんかん）1 階 J103 教室

3 出席者等

（１）部会長等

大谷大学社会学部長 志藤 修史 氏

佛教大学保健医療技術学部教授 松岡 千代 氏

（２）出席者

地域代表者 7 人

北区民まちづくり会議委員 11 人

地域代表者推薦の地域の担い手（比較的若手の方） 7 人

各種地域団体 5 人

北区民まちづくり提案支援事業活用経験者 1 人

大学生 9 人

その他 伝統芸能，伝統産業，寺社仏閣，災害時要配慮者との

関わりが深い団体等 12 人

（例：観世流能楽師，(株)福田喜，今宮神社，地域包括支援センター等）

合計 79 人（行政職員を含む）

4 概要

既開催の 4 部会（高齢化部会，人口減少部会，防災部会，文化・観光部会）を横断して議論する場で，12 月 17 日と 22 日に同内容で開催した。

テーブルごとに対象となる世代を設定し，これまでの部会意見をもとに，個人が孤立することによって生じる様々な課題に対して，まちやまちづくりによって解消していくためにできることは何かという観点から，取組アイデアをさらに深掘りすることを目的とした。

主な意見と取組アイデア

(1) Aグループ 対象者：子ども（概ね6～18歳）

- 1 遊ぶ場所、集まる場所。公園に限らず、まちにそんな場所が増えると子どもたちは喜ぶはず！増やす？見つける？見守る？伝える？どうすれば居場所をつくれるでしょう？

【主な意見】

<世代>

- ・小中高校生等、世代をまたいだグループ単位で集まるとよい。
- ・子どもと高齢者が交流できるような居場所があればよい。

<場所>

- ・空き家や空き地を再整備し、居場所として活用する。
- ・是非、神社を活用してほしい。

<情報>

- ・ラジオミックス京都を活用する。子どもが集まる場所について、子どもの発想で情報発信する。
- ・メール配信で子どもの様子を伝え、親を安心させる。

<その他>

- ・環境問題のイベント、ボーイスカウトの野外活動など、楽しいだけではないひとひねりが必要。
- ・いつでも集える居場所が必要。居場所は安心できる場所でなければならない。

- 2 習い事も多いけれど、地域の文化や活動にも触れて、継承して行ってほしい！食文化、伝統行事、地蔵盆、夏祭り。また、地域企業の活動も知ってほしい！楽しく伝えていくための仕掛けとは？

【主な意見】

<職業体験>

- ・企業とコラボし、「北区子どものまち」(※)の取組を発展させる。
- ・ゲーム形式で北区の企業を回る。
- ・学校での職業体験は1箇所だが、関心のあることはいろいろ体験できる方がよい。
- ・神社の職業体験で、雅楽や舞を体験し、夏祭りで発表するなど、職場体験の後、形に残るように工夫できるとよい。
- ・神社の職場体験は、アルバイト等では体験できないし、文化に触れる機会にもなるので大変よい。
- ・地域に根付いた企業での職場体験もよい。
- ・関心ある職業体験をしてみることで、将来の後継者を生むことに繋がるかもしれない（神社・寺、すぐき作り、京野菜等）。

<その他>

- ・子どもに知ってほしい場所のスタンプラリー。ポケモンGOのようなスマホゲーム。

一人ではなく、複数人でクリアしていく。

- ・地域体験を継続して実施し、経験を重ねた高校生が中心に企画するイベントになれば、大人が企画するよりも子どもウケするだろう。

【取組アイデア】

- ① 「北区子どものまち」(※) に地域企業や神社の声を取り入れ、バージョンアップする。

※子どもたち自身が、まちの仕組みを考える中で、まちづくりの楽しさや社会の仕組みを体感できる事業。北区が大谷大学と連携して、平成28年度から取り組んでいる。

- ② 中学校等の職場体験の対象を拡大する。

(2) Bグループ 対象者：大学生（概ね18～25歳）

- 1 多様な生き方に触れ、地域企業も含めた将来への可能性を広げてほしい！
大学生が学び経験したくなる地域での出会いや交流のしかけとは？

【主な意見】

- ・学生が参加できるイベントがあればよい。大学によっては積極的に情報発信してくれる。
- ・（そもそも大学生は地域とつながりたいのかという問いに対して）つながりたい学生は1/3ぐらいだと思う。
- ・大学生に地域行事に参加し、地域に住み、手伝ってほしい。学生のスポーツ大会を地元でPRしてほしい。大学の知を地域に還元してほしい。地域側も学校行事に参加すべき。地域にどんな楽しみがあるかPRすべき。
- ・学生の立場で参加してみたいイベントとしては、地域のお祭り1日体験、音楽を通じた交流、学生の発表の場があるイベント等。
- ・夏祭りなど地域行事にアイデアを持ち込んでもらう。そのための仕掛けづくりが必要。地域のニーズと学生のやりたいことをマッチングさせる仕組みが必要。地域と大学や学生がつながるプラットフォームがあればよい（SNSを活用）。大学が配信するメールを見て参加する学生もいる（例：紙屋川の清掃活動）。
- ・学生は個人で参加することに抵抗を感じる人も多いので、サークルやゼミ単位で声掛けをしたほうがよい。

【取組アイデア】

- ① 地域・大学・学生がつながるプラットフォームをつくろう
 - ・SNS、大学メールを活用し、情報発信。地域のホームページと大学のホームページを連携させる。
 - ・大学生を広報班に位置付け、見守り活動など地域活動に参加してもらう。
- ② 北区が住みよいまちであることをアピール
 - ・家賃が安い物件や割のいいバイト先を紹介する。
 - ・大学近くのバス停に地域の掲示板を設置する、学食のトレイに地域の宣伝を載せるなど、折に触れて大学生が地域情報に接する状況をつくる。
- ③ 地域のお祭り1日体験

地域として具体的に依頼し、例えば盆踊りで、音楽を通じた交流をしたり、学生の発表の場として機能させるなど、学生のニーズに応じた取組を盛り込む。

- 2 大学での学びを、地域で実践・発表してほしい！
ゼミやサークルが地域で活躍するために、互いに知り合える仕組みとは？

12月22日の共同部会で議論

3 学生自身の災害時の対応や支援者としての活躍に期待！
そんな安心を生む関係・連携を育む仕組みとは？

【主な意見】

- ・ 学生は避難場所を知らないことが多い。避難訓練で単位認定したり，大学入学時のオリエンテーションで伝えるなどの工夫が必要。
- ・ 学生が地域と一緒に避難ルートなどを示したマップを作る。
- ・ 地域と大学が防災協定を結ぶ。
- ・ 佛教大学の消防防災サークルFASTのようなボランティアサークルを増やす。
- ・ 災害発生時に動くことができる学生とのネットワーク構築が大切。
- ・ 学区主催の防災訓練への参加者の少なさが課題。防災訓練とイベントを組み合わせるなど，学生のアイデアを貸してほしい。

【取組アイデア】

- ・ 災害時に機能する，学生とのネットワーク構築や防災訓練の参加者を増やすための協力体制の確立等。

(3) Cグループ

対象者：若者世代（概ね20～30歳代の独身の人）

1 北区での暮らしに夢や希望を持ってほしい！いろんな働き方や暮らし方があることを知ってもらうしかけとは？

3 災害時での、自身の対応や支援者としての活躍につなげてほしい！そんな安心できる関係を育む取組とは？

【主な意見】

- ・北区には山間部とまちなかがある。山間部にはコンビニもないところもある。まちなかは住宅地として住みやすいと思うが、若い人から見てどうなのか知りたい。
- ・シェアハウスに住む学生は意外に多い。個人のプライバシーがしっかり守られる個室もある。行政が紹介して、安心して住めるような制度があれば、所有者としても安心だ。
- ・シェアハウスは住むだけではなく、一緒に料理をしたり、協力して農業をするなど、多様な価値を見出さう。学生に限らず、若者も活用できるのではないかな。
- ・自身が独身の20～30代の頃は北区には仕事がないと感じ、外に出ていたが、北区は独立して店を持つには非常に魅力的なエリア。内容も多彩で、パソコンひとつで仕事する人もいれば、農業もある。
- ・人口減少という観点から、京都市内で人の取り合いをするのか、滋賀など近隣県から来てもらうのか、という価値判断もある。学区のイベントでも、若者は面白いものには参加する傾向がある。
- ・学生の意見として、既にあるものに参加するよりも、企画段階から主体的に参加できるようなものであれば関わりたいと思う。
- ・新大宮広場のように、若い人が自由に出店できる場所と機会がたくさんあればよい。押し付けではなく、企画から関わり、イチからつくることができる機会が大切。また、北区が外国人にとっても住みやすい環境にしていきたい。
- ・北区のまちなかでは本当に空き家が目立つ。移住者に空き家を貸せないか。住民税を下げるなどの思い切った対応ができないか。山間部では京大生等で構成される山仕事サークル「杉良太郎（すぎ よしたろう）」の活動で大変助かっている。土地を持つ人には農業をやってほしいという声もある。

【取組アイデア】

① 北区の暮らし妄想ラボ

内容：「今ある暮らしを伝える」よりも、「北区でこんなことができるかも！」を提案するプロジェクト。

※イチから主体的にかかわれる内容であることが大切。

※志ある職人さんや芸術家で、何かチャレンジしたいけれど資金面の課題などから二の足を踏む人が実際に出店できる場所を設ける。

広報：ラジオミックス京都の活用，CM，動画の作成。声を集める仕組みと発信する仕組みが重要。

活用資源：空き家，空き地，山，小学校などの資源を有効活用する。

② 災害時に役立つ地域の炊き出しBBQ大会

内容：地域の広場や小学校などで，火おこしの練習や炊き出しの予行演習を兼ねてバーベキュー大会を開催。

2 北区で暮らしていることをもっと楽しんでもほしい！

文化のこと地域のこと，若者が学び経験したくなる出会いや交流の仕組みとは？

12月22日の共同部会で議論

(4) Dグループ 対象者：子育て世帯（概ね0～6歳の子ども，20～40歳代の親）

1 子育てしている期間も，北区を楽しく過ごしてほしい！

いろんなサービスとあわせて，地域で子育てを支える仕組みとは？

12月22日の共同部会で議論

2 親子で北区の魅力を体験してほしい！自然や文化，地域の魅力を伝え，地域で育った思い出をつくってもらうには？

【主な意見】

- ・イベントに向けた地域団体の役員会議や打ち合わせは回数も多く，若い人が全て出席するのは大変。会議の回数を減らしたり，全て出席しなくてもよいなどの工夫をして参加を呼び掛けてはどうか。
- ・地域の役員をお願いする際，楽しい和気あいあいとした入りやすい雰囲気作りが必要。知らない人の中に入っていくのは誰でも気が引けるもの。
- ・上賀茂学区では，農村文化が残っており，消防団に若い人は入るものという雰囲気が残っているため参加に繋がっている。そのような雰囲気作りも有効。
- ・金閣学区の役員は女性が多い。若い女性パワーを活用するためにも，会議が子どもの世話付きであれば参加しやすくなる。また，夜の時間帯よりも昼間の時間帯の方がいいという人もいる。昔は近所の人に子どもを預かってもらったりしていたが，最近では難しい。
- ・小学生の場合，「放課後まなび教室」（※）や「みやこ子ども土曜塾」（※）とコラボして，それらの実施時間帯に会議を開催するという方法はどうか。
- ・大学生が地域行事に参加し，子どもをみるなどのお手伝いをしてもらえれば助かる。
- ・大学生を単に地域行事の人手として便利使いするのでは誰も来ない。学生リーダーを決めてもらい，企画段階から参加してもらうことで，自主的に動いてくれるのでは。
- ・若い人に参加してもらうためには，楽しい場になるよう工夫が必要。楽しそうと感じると，少々しんどくても行こうかなという気持ちになる。
- ・文化・芸術，スポーツに子どもが参加するような取組なら，親や祖父母も集まるのではないかな。
- ・北区には，文化・芸術などで大変秀でた実績のある人が実は多く住んでいる。そのような人を発掘して協力してもらい，文化・芸術やスポーツを子どもに教えてもらう。

※放課後まなび教室…放課後の子どもたちに，学習の習慣づけを図る「自主的な学びの場」と「安心安全な居場所」を提供する事業。市内全小学校で実施している。

※みやこ子ども土曜塾…「まち全体を学びと育ちの場に」を目標に，土曜日ははじめ学校休業日に様々な学びの場を提供し，子どもを育む市民ぐるみの取組。

【取組アイデア】

集まれ！となりの人間国宝さん教室

北区には、文化・芸術などの分野で大変秀でた実績のある人が住んでいる。そのような人を発掘して講師になってもらい、地域で文化・芸術やスポーツを子どもに教えてもらう。小学生の場合、「放課後まなび教室」や「みやこ子ども土曜塾」とコラボして、それらの時間帯に会議を開催してはどうか。また、教室で学んだ成果を、地域のまつりなどで発表すれば、発表を見に親や祖父母も来る（今まで地域のまつりに参加しなかった層の発掘にもつながる）。

3 災害時にも、安心できる地域にしたい！親子にとっての安心のために、地域にできることは！

【主な意見】

- ・子育て世代は、年齢的には災害時に最も頼りになる存在だが、自分の子どもや親などの面倒をみることで精一杯で、地域の世話役までこなせないのではないか。
- ・できる人がやればよい。避難所では中学生も立派に戦力になっていると聞く。できる人が動いて困った人を助ける仕組みを作る。

(5) Eグループ 対象者：そろそろ老後が気になる世代（概ね40～60歳）

- 1 趣味や特技など、北区で学びを深めてほしい！サークル活動や講座など、学びや遊びを、地域への入口にするには？

【主な意見】

- ・働き世代であり、日中のイベント参加は困難。
- ・休日に40～60歳対象のイベントを開催する。
- ・家族で参加できるイベントなどを企画することで、家族サービスとセットで参加できるのでは。
- ・自分から仕掛けていく。とにかくやってみる、言ってみる。一人でも始めてみることで、コミュニティができていくはず。
- ・忙しい40～60代が参加しやすいタイミングを見極めて、地道に継続開催する。
- ・イベント等に来ない人をどう引っ張り込むか。来てほしい人へのアプローチをどうしていくか。（こまめに声掛けするしかないのか…）
- ・最初に登録してもらい、その人のニーズに応じた情報を提供する。人を誘ってきたら特典を用意するなど工夫を。

【取組アイデア】

「とにかく集まれ！大人の土曜塾」

紙媒体、FAX、SNS、ラジオなど、様々な媒体で情報発信。最初に登録し、興味ある分野にチェックを入れる。必ず一人は連れてくる。いろいろな仕掛けを用意する。既にやっていることを発信する。

【補足】出てくること自体が難しい世代なので、イベントを分かりやすく発信するとともに、半ば強制的に参加してもらう仕組みを作ることで、地域活動に引き込んでいく必要がある。

- 2 体の健康だけでなく、心も健康でいてほしい！
美化活動や子育て支援など、空いた時間に気軽に参加できるような社会貢献の仕組みとは？

12月22日の共同部会で議論

- 3 災害に対して、安心できる地域にしたい！情報が行き渡る、高齢者にとって安心できる防災とは？

【主な意見】

- ・トレパトウォーク（トレーニングとパトロールを兼ねたウォーキングのこと）、インターバル速歩のような、楽しみながら体を動かせる方法があればよい。
- ・コンビニを含む地域の店に協力してもらい、健康情報を発信。（買い物は引っ込み

がちな人も行くので、その機会を捉えて発信する。）

- ・ YouTube 等で北区のいいところを発信（湧き水を汲んでお酒を楽しむとか。）

【取組アイデア】

「お店や商店街を活用しよう！」

買い物スタンプラリーをして、最後はウォーキングなど健康活動に参加してもらう。

(6) F グループ 対象者：元気な高齢者

1 趣味や特技など、北区で学びを深めてほしい！サークル活動や講座など、学びや遊びを、地域への入口にするには？

【主な意見】

- ・女性は引っ張り出しやすく、グループで参加することが多い印象。
- ・男性はプライドが高く、得意な分野は参加するが、自分に合わなかったり、明確な目的がないものは敬遠しがちなようだ。会社勤めをしていると、上下関係に慣れて、地域のフラットな関係性に馴染めないということもある。
- ・男性の共通の話題としては、野球や競馬、農業、旅行、健康に関する話など、女性と比べると限定されている印象。
- ・友達になる「仕組み」のようなものが必要。何度も誘ったり、イベント後などタイミングを見計らって声を掛けることも大切。

【取組アイデア】

特に男性に対しては、「人の役に立つ」など目的を明確にした集まりであることがアピールになる。そのうえで一緒においしいものを食べ、酒を飲み、集まりに帰属意識を持ってもらうことで、継続した参加につなげていく。

2 高齢者の豊富な知識や経験をまちに活かしてほしい！

若い世代に刺激を与えるような、まちづくりへの関わり方とは？

1 2月22日の共同部会で議論

3 災害に対して、安心できる地域にしたい！情報が行き渡る、高齢者にとって安心できる防災とは？

【主な意見】

- ・防災訓練をしても、高齢者ばかりで比較的若い世代は出てこない。
- ・高齢者等を避難させるためには事前の情報が必要だが、個人情報の壁もある。町内会長が要支援対象者を把握しているが、他の人にも共有することは難しいところが課題。
- ・山間部では、「自宅外に避難する際は町内会長に言う」ということが当たり前になっているが、まちなかではそうではないと思う。仕組みとして確立する必要があるかもしれない。

【取組アイデア】

- ・地域の人が知っている、「川のどこの水位がどこまで上がったらかこの地域は注意した方がいい」とか、「この地域は坂になっているから他の地域よりも浸水する可能性が高い」といった、市が出す避難情報では分からないようなローカル情報をしっかり共有しておき、「ここがこうなったら避難する」という「危険スイッチ」のようなもの

を地域が共通認識として持つようにしておく。

- ・自宅から避難する際には、避難していることがひと目で分かるよう、共通の目印を自宅に掲げる。

(7) Gグループ 対象者：健康に不安を感じる高齢者

- 1 高齢になっても、安心して暮らしてほしい！多くの人と、顔の見える関係を育むには？

【主な意見】

<交流>

- ・節目節目で食事会を企画する。
- ・町内会単位でイベントを開催する（結局同じ人ばかり参加する、という意見もあり）。
- ・参加したり、関わりを持ち続けようという気持ちになるには、感謝したりされたり、「気持ちのおみやげ」のようなものが大切だ。
- ・子ども食堂が増えたが、これからは子どもだけを対象にするのではなく、高齢者も集まるようにする。子ども食堂は貧困のイメージがあり、人によっては行きづらく感じてしまう。開かれた、誰でも参加できる「みんな食堂」が必要だ。

<交通・足>

- ・敬老乗車証があっても使えていない人が多い。低価格で利用できる送迎車があれば気軽に出かけられる。
- ・気軽に声を掛けられる人間関係づくりが大切。車で通りがかりに声を掛けて目的地まで連れて行ってあげるような関係があれば、その時の世間話からいろいろなことが分かる。

<日常の小さな困りごと>

- ・大学生が困りごとのアンケートを集める。
- ・風呂掃除の実情を知り、手助けする。（風呂掃除が大変で週1回しか風呂に入らない人もいるという声を受けて。）
- ・役割があることで人は輝くことができる。すぐき作りやしめ縄作りなど、多少形は悪くても昔取った杵柄でできる。そういったものを安く売れる場所があるといい。
- ・高齢者のお宅で格安の大学生下宿を運営する。

【取組アイデア】

① 格安下宿へどうぞ！（京都市版「ソリデール」）

子育てが終わり、部屋が余っている高齢者が、空き部屋を学生の下宿として活用、運営する。学生にとっては家賃が安く済む、昔の知恵を得られる。高齢者にとっては話し相手ができ、防犯にもなってスマホの使い方など最新の知恵を得られるというメリットがある。まちとしても、世代交流が促され、学区運動会などの地域行事に大学生が参加するきっかけとなる。

② 「みんな食堂」をはじめよう！

子どもから高齢者まで多世代が集まる、「子ども食堂」の全世代対象版。ボランティアが運営し、食材や調理器具やスーパーやコンビニ、JAなどから寄付してもらい調達する。大学生が子どもに宿題を教えるなど、連動した取組も考えられる。子どもやボランティア、学生3人以上で無料など、料金設定を工夫する。

個人にとっては安く食事しながら交流でき、居場所にもなる。またそういった場所が増えることで、誰もが居場所があると感じるまちづくりにつながる。

2 災害に対して、安心できる地域にしたい！情報が行き渡る、高齢者にとって安心できる防災とは？

【主な意見】

- ・情報共有が何よりも大切だ。住民間だけでなく、各種団体や地域外の団体など、幅広い共有が必要。特に山間部は左京区・右京区とも隣接しており、山に境界はないため、行政区をまたいだ連携が特に重要と感じる。
- ・学区で決められた避難所が必ずしも最寄りとは限らない。近いところに避難できるようにできないか。その場合、あらかじめ情報共有していないと、避難所では来るべき人が来ない、と混乱状態になる。あらかじめ決めておく必要があるだろう。

【取組アイデア】

- ・情報共有の徹底を！

地域ケア会議での情報共有の徹底。特に山間部では行政区をまたいで連携することが重要だ。それにより、個人にとっては避難の心理的ハードルが下がり、まちにとっては避難が難しい人の把握、対応方法の事前確認ができる。

(8) Hグループ 対象者：北山三学区

1 多くの人に北山の魅力を感じてほしい！イベント参加や活動への協力など、北山の魅力を活かした交流のしかけとは？

3 山間地でも安心して暮らしてほしい！災害時の対応や復旧活動など、市街地の住民とできることは？

【主な意見】

- ・人口が減り、兼務する役職が増えるなど、一人にかかる負担は重くなっている。ゴミ分別などで学生が協力してくれており非常に助かっているが、受け入れ側の年齢だけが上がり続けているという現実がある。
- ・ホストとゲストの関係にある限り、受け入れ側の労力が必要という課題は残る。学生や地域外の人活動を受け入れるより、「任せる、自由にさせる」と受け入れ側の負担が減るかもしれない。ただし、任せた後の考えは継続性をもって考えないと、ただやっているだけになるのではないか。
- ・単純に受け入れというよりも、WIN-WINの関係で、何か困っていることや助けてほしいことを大学生に頼む方法もある。
- ・子ども世代に集まってもらい、親世代が住む地域の状況を知ってもらえれば。自助も必要であり、家族で何とかしてほしいところはある

【取組アイデア】

・ニュー青年会

地域に親が住む子ども達のネットワーク化。不安や困りごとを相談できる関係を作り、まちの未来を担う。

2 自然に寄り添った暮らしの魅力を知ってほしい！北山三学区を続けるための、移住を促す仕組みとは？

【主な意見】

- ・そもそも3学区に移住者が来てほしいのかという疑問の声もあるようだが、やはり地域に灯かりがあるのは嬉しい。できれば、誰かわかっている自分たちの子ども世代に帰ってきて住んでほしいと思う。
- ・移住が進まないのは、市街化調整区域のため、売買や建て替えなどが難しい地域であることも関係しているのかもしれない。
- ・以前、区域外から就学を希望する児童を受け入れている他市の小学校を視察し地域で報告した際は、積極的に受け入れることに賛否があった。
- ・地域を出た人が戻ってくるシステムがあれば。夏まつりなどは子どもがたくさん来るので、この機運を一時的なものにしないようにしたい。
- ・北山3学区について話す会議は、実際に地域で話す方が現実味があると思う。現地

のこと知らずに話をしているので実際の現場を見ながら話すほうが良い。

- ・土日のみ学校の校舎を開放し体験活動をする人を受け入れることはできないか。行事で地域が疲弊しているのでできるだけ減らすことも必要だが。
- ・区役所が率先して地元の様子をみる必要がある。

【取組アイデア】

① 川で金魚すくい！

子どもが楽しめる山や川を活かしたイベント。孫世代に向けたイベントを移住希望者にも広げる。まずは雲ヶ畑からやってみる？

② 小規模特認校制度を活用する。

P T Aと相談しながら学校を通じた北山三学区の体験学習を。まずは週末からスタート。中川は「村おこしの会」も一緒に。

③ 会議を北山で！

北区のことを考えている人が北山三学区に集まる機会を作り意識を変える。まずはまちづくり会議を北山三学区で開催する。

(9) I グループ 対象者：障害者

- 1 障害者への理解が深まり、誰もが安心して生活できる環境をつくりたい！
地域で障害者への理解が広がるしかけとは？？

【主な意見】

＜障害への理解＞

- ・障害者をあまり知らない。身体障害者手帳の内容や、手帳を持つ人が学区でどれだけいるのか、どこまで話を突っ込んでいいかわからない。
- ・「見える障害」と「見えない障害」があるので、どう接してよいかわからない。手助けして何かあって責任を問われても困る。
- ・「何かお手伝いしましょうか」と尋ねてほしい。また障害を持つ人と友達になってほしい。そうすれば自然と分かり、手引き歩行も身に付くのではないか。
- ・障害のある人は自分と違うと区別せず、同じ住民だという思いが大切。誰でも急病や事故で障害を持つ可能性があることに関心を寄せてほしい。
- ・まちの段差はその人の課題でなく、まちの課題という認識が大切。
- ・地域包括支援センターの高齢者の見守り名簿は、75歳以上の単身生活者を対象にしているが、障害者と同居の場合でも対象にしてほしい。
- ・接し方は、施設の支援スタッフを見るだけでも勉強になる。まずは出会えるところに出かけるといい。ライトハウスの喫茶コーナーを利用してはどうか。

＜障害者と一緒に開催する催し＞

- ・当事者が何を望んでおられるのかをまずは知ることが大切。イベントを企画したが、そこを把握していなかったため参加者が少なかった。企画の段階から地域と障害者とのコミュニケーションが必要。
- ・「フナオカスタンダード」では多くの障害者に会える。ぜひ参加してほしい。
- ・各学区で「プチ・フナオカスタンダード」を開催してはどうか。
- ・障害者施設も地域に出ていく努力をしている。町内会に入り、掃除ボランティアをしているところもある。お互いを理解し合う良いきっかけである。
- ・学区行事に障害者自身が参加し、自分のことを語ることで地域に障害への理解が広まる。障害者も役割を果たせることに生きがいを感じるのではないか。
- ・町内の餅つき、運動会、敬老会に地域の障害者施設からの参加者を受け入れてはどうか。

【取組アイデア】

- ・各学区でプチ・フナオカスタンダード
地域の催しや行事（運動会、お祭り、敬老会など）に障害のある人が出張。
施設の人が障害者の得意分野を見極めて、一緒に地域へ出て参加。（例 地域の
カフェにコーヒーを入れに来てもらうなど）

2 災害に対して、障害があっても安心できる地域にしたい！

障害者にとって安心できる防災とは？

【主な意見】

- ・「北コミまつり」などでは障害に関するブースもあり、「フナオカスタンダード」で障害者の防災に関するブースを来年度は設置してはどうか。
- ・学区の様々なイベントで啓発していく。
- ・福祉避難所の訓練を多くの学区に広げていく。
- ・障害のある当事者も避難訓練に積極的に参加し、障害者がここにいるという発信をする意識改革が必要。

【取組アイデア】

- ・フナオカスタンダードのような催しを開催

障害のある方の防災を考えるブースを出す。佛教大学で災害訓練に取り組んでいる先生がおり、行政も連携する。まずは障害者のニーズを聞くことが大切。心のバリアフリーを広げていくためにも必要な取組。

(10) Jグループ 対象者：外国人

- 1 北区に移り住んだ外国人が地域の魅力を感じながら楽しく暮らしてほしい！
北区の良さを感じてもらい地域に馴染んでもらうしかけとは？

【主な意見】

- ・誤解を恐れずに言うが、居住外国人は、大きく2種類に分けられると思う。生活に余裕のある外国人と必ずしもそうではない方。後者は、例えば出稼ぎとして単身で来日し、働きつめの毎日のような印象。地域に溶け込む余裕がなく、仲間内で独自のコミュニティを形成している。こうした人たちにターゲットを絞り、対策を立てることが必要ではないか。
- ・まずは実態把握が重要。どこに、どういう状況の外国人がどれだけ住んでいるのかを、地域が把握する仕組みができないものか。
- ・悩みを打ち明けられる場としての相談窓口が必要だが、現代ではネットを上手に活用することが有効。外国人同士の独自のコミュニティをネット上でも形成しているはず。そこにうまく働きかけることが必要。

- 2 外国人観光客に北区の魅力をもっと伝えたい！
特定の観光地にとどまらない、北区の魅力を届けるための取組とは？

【主な意見】

- ・ハードとソフト両面でのアプローチが必要。ハード面では、楽只市住の再整備もふまえて、インフォメーションセンターを設置してはどうか。大学生を活用し、案内所であると同時に交流センターのような機能を持たせたい。北区の伝統産業製品、農林産品等の紹介、北区アンテナショップのような機能もあると良い。ソフト面では、コーディネーター。人気のゲストハウス経営者は優秀なコーディネーターでもある。ほんまもんをうまく組み合わせて紹介している。
外国人観光客は、それぞれの国の口コミサイトを活用しているので、相手に応じ情報を適切に流す必要がある。
- ・外国人に発信する前提として、地域の魅力を地域が知る必要がある。地域住民の口コミサイトの立ち上げ、生き字引や長老へのインタビュー、まち歩きなどにより、まずは地域の魅力の掘り起こしが必要。

- 3 北区に移り住んだ外国人に災害時での、自身の対応や支援者としての活躍につなげてほしい！そんな安心できる関係を育む取組とは？

12月22日の共同部会で議論

5 部会長のまとめ

(志藤教授)

- ・大学と地域の接点づくりや、男性の地域活動への参画など、「孤立」の解消にまちづくりが果たす役割のヒントが多く出されたと感じる。まちづくりは一朝一夕に進むものではないが、皆が自分ごととしてとらえていく空気が最も大切だ。そのきっかけづくりとなるような基本計画となるよう、事務局には本日出された意見をしっかりと受け止めてもらいたい。

(松岡教授)

- ・意見が多く出された部分と、比較的少なかった部分があると思う。それも含めた現状を踏まえ、どう行動していくかが北区の未来をつくっていく。皆さんが率先して行動することが大切と感じた。

北区民まちづくり会議「共同部会」（２日目）開催結果

1 日時

令和元年 12 月 22 日（日）午後 3 時～5 時 15 分頃

2 場所

大谷大学 尋源館（じんげんかん）1 階 J 103 教室

3 参加者等

（１）部会長

京都産業大学現代社会学部長 藤野 敦子 氏
立命館大学文学部准教授 河角 直美 氏
大谷大学社会学部長 志藤 修史 氏

（２）出席者

地域代表者	5 人
北区民まちづくり会議委員	5 人
地域代表者推薦の地域の担い手（比較的若手の方）	4 人
各種地域団体	7 人
北区民まちづくり提案支援事業活用経験者	4 人
大学生	2 人
その他伝統産業，観光，寺社仏閣，大学関係者 （例：(株)龍村光峯，(株)らくたび，今宮神社）	5 人

合計 54 人（行政職員を含む）

4 概要

既開催の 4 部会（高齢化部会，人口減少部会，防災部会，文化・観光部会）を横断して議論する場で，12 月 17 日と 22 日に同内容で開催した。

テーブルごとに対象となる世代を設定し，これまでの部会意見をもとに，個人が孤立することによって生じる様々な課題に対して，まちやまちづくりによって解消していくためにできることは何かという観点から，取組アイデアをさらに深掘りすることを目的とした。

主な意見と取組アイデア

※II グループ（北山三学区）、I グループ（障がい者）は関係者が参加しなかったため、テーブルの設定なし

（1） Aグループ 対象者：子ども（概ね6～18歳）

- 1 遊ぶ場所、集まる場所。公園に限らず、まちにそんな場所が増えると子ども達は喜ぶはず！増やす？見つける？見守る？伝える？どうすれば居場所をつくれるでしょう？

【主な意見】

<子どもの現状>

- ・公園はあるが遊んでいる子どもは少ない。今の子どもは塾や習い事で忙しい。一方で、地域住民がボランティアで児童公園の清掃をし、公園がきれいになってからは遊ぶ子どもが増えたり、ごみを捨てる人が減った事例もある。
- ・夜遅くまで塾に通う子どもが増えたと感じる。地域でのつながりが少なくなるのと引き換えに、塾での交友関係は増えているのかもしれないが。
- ・塾では、普段知り合うことのない他の小学校の友達ができてよかった面はある。

【取組アイデア】

- ・子どもの頃、近所の地区センターには無料で使える体育館があった。雨が降っても遊べるので、マンションの子ども同士で集まっていた。北区でも、いきいき市民活動センターや体育館などで子どもが自由に使える時間を作ってはどうか。

- 2 習い事も多いけれど、地域の文化や活動にも触れて、継承して行ってほしい！食文化、伝統行事、地蔵盆、夏祭り。また、地域企業の活動も知ってほしい！楽しく伝えていくための仕掛けとは？

【主な意見】

<関わる人のメリット>

- ・紫野学区では、紫野高校吹奏楽部を地蔵盆に招いている。
- ・町内の地蔵盆に大学生が手伝いに来てくれ、役員の負担が軽減したほか、学生も楽しんでくれていた。地蔵盆での学生とのコラボは、お互いにメリットがあるのでは。

【取組アイデア】

- ・地蔵盆に併せてビアパーティーを実施している町内もある。地蔵盆の供え物を飲食に充て、材料費は無料。40世帯の町内だが、去年は78人が参加。みんなで楽しむのが成功の秘訣。地蔵盆で各人が特技を発表する場を設けてはどうか。実施後、ビアパーティーを開催するのもよい。
- ・紫野小学校では、4年生の授業で「やすらい祭り」に取り組んでいる。子どもは、一度、授業で経験しているので、その後もお祭りに参加するようになる。

(2) Bグループ 対象者：大学生（概ね18～25歳）

1 多様な生き方に触れ、地域企業も含めた将来への可能性を広げてほしい！
大学生が学び経験したくなる地域での出会いや交流のしかけとは？

2 大学での学びを、地域で実践・発表してほしい！
ゼミやサークルが地域で活躍するために、互いに知り合える仕組みとは？

【主な意見】

＜交流する仕組み＞

- ・PBL（プロジェクトベースドラーニング：少人数のグループで主体的に問題解決を目指す学習形態）に取り組んでいる大学がある。2週間～半年、地域や企業と連携して学生を送り込み、学部を超えて単位を認定。地域等から出されたお題に回答を出す仕組み。
- ・特に福祉系の学部では、教員と地域が個人で繋がっているが、仕組みとして把握していないことが課題。

＜取組を進めるためのキーパーソン＞

- ・例えば、地域、大学、学生、企業から1人ずつキーパーソンが出て、ハブ（人と人のネットワークの中心を担う人）になればよいのではないか。行政と大学の会議に地域、企業などにも入ってもらうというのも良いかもしれない。
- ・ハブとなる人（人と人のネットワークの中心を担う人）を資金面でサポートしないと続かない。
- ・地域・大学・企業からキーパーソンを出してハブになる。その中に学生も入る。大阪大学ではそうしたことを進めている。地域にその意識が根付いているかということもあり、学区によっては全て大学や企業任せになってしまうところがあるかもしれない。まずは、地域の問題意識をそろえる必要がある。
- ・ハブとなる人が、義務としてではなく、楽しいと感じられないと、熱を入れて取り組まない。

＜地域・大学・企業の関係＞

- ・行政と大学の会議に地域、企業に入ってもらうというのもよいかもしれない。課題は大学の縦割りをどうするか。
- ・現状では、企業と地域は関係性ができていない。

【取組アイデア】

・「ハブをつくる」

大学、学生、地域、企業、区役所からキーパーソンを出し合い、情報が集まる仕組みを作って連携の窓口にする。資金面でのバックアップや、キーパーソンが楽しいと感じられることが継続の秘訣。既存の行政と大学の会議体に地域と企業も入ってもらうことも検討する。

・「北区で大学フェス」

北区内の学生が楽しめるイベント。地域もブースを出して魅力をPRするイメージ。実行委員会を立ち上げ、ハブ人材（人と人のネットワークの中心を担う人）を育成する目的も併せ持つ。学園祭やふれあい祭りなど既存の取組もうまく活用。資金は各機関が出し合う。

- 3 学生自身の災害時の対応や支援者としての活躍に期待！
そんな安心を生む関係・連携を育む仕組みとは？

12月17日の共同部会で議論

(3) Cグループ

対象者：若者世代（概ね20～30歳代の独身の人）

1 北区での暮らしに夢や希望を持ってほしい！

いろんな働き方や暮らし方があることを知ってもらうしかけとは？

2 北区で暮らしていることをもっと楽しんでほしい！

文化のこと地域のこと、若者が学び経験したくなる出会いや交流の仕組みとは？

【主な意見】

＜若者への関わり方・発信方法＞

- ・森林再生のNPOで活動しているが、特に若者世代はなかなかついてこない。まずは学生を取り込み、若い世代へと広げていくのがいいかもしれない。取り組みやすい「食」をテーマに、北区なら「すぐき作り体験」などもおもしろい。
- ・大学生についてもそうだが、若者世代には、自由にやってもらいながら、核となる人材を探すような関わり方が大切。北区での暮らしに関わる面白い情報をネット発信するのもよい。
- ・若者が集まり、様々な人と出会える場所はあるが、情報が行き届いていない。北区は寺が多く、文化サロンのようになっている。大徳寺近くのお店でサロンのような取組をしているところもある。大切なのは情報発信。

【取組アイデア】

- ・「〇〇大学」のように、北区にいれば、ジャンル別の様々なテーマで集まって学べる場があり、土日に充実した時間を過ごせるということを発信してはどうか。

3 災害時での、自身の対応や支援者としての活躍につなげてほしい！そんな安心できる関係を育む取組とは？

12月17日の共同部会で議論

(4) Dグループ 対象者：子育て世帯（概ね0～6歳の子ども，20～40歳の親）

- 1 子育てしている期間も、北区を楽しく過ごしてほしい！
いろんなサービスとあわせて、地域で子育てを支える仕組みとは？

【主な意見】

＜子育てを取り巻く現状と課題＞

- ・病児保育や病児学童の充実が課題。病院との連携も必要。登録が面倒だったり、定員数が十分でない実情がある。自分は子育て中、なかなか歯医者や美容院に行けなかった。地域で預かってもらえる場所があるとよい。
- ・親同士の交流がもっと活発になれば。PTAのメンバーは忙しすぎて、誘っても負担に思われる。地域のイベントを一緒にやって、その打ち上げで一緒に宴会をすれば気軽に交流し、距離が縮まり仲良くなれるはず。
- ・子育て世代は、共働きが増えて家になかなかいない。そんな状況でも、地域活動に参加してもらいやすくするためには、子どもと地域活動に一緒に参加する、地域活動を一緒に楽しむという意識改革が必要。

＜地域とのつながり方＞

- ・いくら地域に民生さんや主任児童委員がいるといっても、相手を信用しないと相談には来ない。地域の会合で顔を合わせたり話をするのが大切。

＜子どもへの関わり方＞

- ・昔はもっと子ども中心のイベントがあった。「大人からのおしつけ」にならないようにしたい。
- ・大人が「子どものためによいだろう」と何でも先回りして用意している風潮がある。

【取組アイデア】

・「子どもと行きたくなる会議」

北区で開催される地域の会合には子どもを連れていくことが当たり前で、むしろ子どもの意見も取り入れて、子どもも会議の参加者として迎えられるような状況にする（子どもがいたほうが雰囲気は和むし、大人同士の距離感も縮まる。親同士子育ての悩みも話しやすい）。

小さな乳幼児は預かりスペースの用意と、地域で子どもの面倒をみる人をあらかじめ頼んでおく。託児で預かってもらった地域の人と親子に信頼関係ができ、一石二鳥！会議の案内文には「子連れ大歓迎」の一言を必ず入れる。

・「地域の子ども×おやじおふくろの会で「こどものまち」寺子屋版」

会場は昔に遊び場だったお寺。子どもの意見をきいて、子どもが本当にやりたいことを自分たちのために企画。おやじの会と連携し、雷親父も一緒に募集。よい企画ができれば、北区民まちづくり提案支援事業で予算を付けて実施する。

2 親子で北区の魅力を体験してほしい！自然や文化，地域の魅力を伝え，地域で育った思い出をつくってもらうには？

3 災害時にも，安心できる地域にしたい！親子にとっての安心のために，地域にできることは！

12月17日の共同部会で議論

(5) Eグループ 対象者：そろそろ老後が気になる世代（概ね40～60歳）

1 趣味や特技など、北区で学びを深めてほしい！

サークル活動や講座などの学びや遊びを、地域参加の入口にするには？

【主な意見】

＜現状＞

- ・シルバークラブはスポーツ好きな人も多く、様々な活動をしているが、そこに若い世代を呼び込む取組はまだない。
- ・区社協では65歳以上を対象に映画やものづくりをしているが、年齢要件を外すことを検討してもよいかもしれない。
- ・40～60歳は参加できるサークルが意外と少ない。健康が気になる世代なので、もっと体を動かしたいが、活動施設や会場が取りにくい現状も。また人によって興味や関心も様々で、何がヒットするか分からない。

＜地域と企業の連携＞

- ・パトラン（パトロールランニングの略。ランニング中にパトロールも兼ねて、まちの安心安全を高めようという取組）から派生したフットサルの集まりの後、企業からのプレゼンテーション時間を取ったり、下火になった銭湯を盛り立てるため、お風呂道具を使った卓球大会をするなど、地域と企業双方向のメリットがあるように工夫している。
- ・活動の中で、地域に呼び込みたい相手の趣味を知る。そこでフォローすると呼び込める。

【取組アイデア】

- ・「地域活動を増やしたい。増やして楽しみたい。」

まず、既存のさまざまな活動を広報→体験会（見学会）を開催→参加につなげる。また、既存にないもので、こんな活動をしたいというプロジェクトを広報し、賛同者が多くあれば実行し、場所を借りられるような仕組みづくりをする。広報については行政や地域がSNSや紙媒体により実施。

2 体の健康だけでなく、心も健康でいてほしい！

美化活動や子育て支援など、空いた時間に気軽に参加できるような社会貢献の仕組みとは？

【主な意見】

＜仕組みづくりで大切にしたいこと＞

- ・ボランティアだけでは続かない。少額でもいいので、ビジネスになるようにすると頼みやすい。一部の人に負担が大きいと敬遠される。
- ・男性は特に趣味が合う人同士をマッチングして合わせていく。ゴルフ、釣りなどその人の関心のあるものから関係を作っていくと、地域活動に確実に呼び込める。そ

のためには、常に人材発掘の視点を持ち、ニーズとマッチングできるように関心を寄せてフォローできる人材が必要。マッチングの母体は、各種団体が担う。

- ・活動の会場を借りるとき、無料で借りられるところは、活動前後に30分間の掃除や草引きをしている。そういう社会貢献の仕方も大切。

<地域と企業の連携>

- ・昨日、大阪でサンタの姿で、菓子メーカー協賛のお菓子を配布しながら走った。自治会も走り、地域にも企業にも自分たちの広報にも健康づくりにもなり、みんなにメリットがある取組だと感じた。
- ・引きこもっている人、誘っても出てこない人には、個人宅でできるものを提供して、つながりを作る。例えばイラストを作ってもらう。SNSを通じて参加など。

【取組アイデア】

- ・ 小さなご縁を逃さない仕組みをつくる（ハンターの目で）

少しの繋がりでも逃さず、常に人材発掘の視点を持ちながら、相手のニーズとマッチングできるように、関心を寄せてフォローできる人材を育てる。

- 3 災害に対して、安心できる地域にしたい！情報が行き渡る、高齢者にとって安心できる防災とは？

12月17日の共同部会で議論

(6) Fグループ 対象者：元気な高齢者（概ね60～75歳）

1 趣味や特技など、北区で学びを深めてほしい！
サークル活動や講座など、学びや遊びを、地域への入口にするには？

2 高齢者の豊富な知識や経験をまちに活かしてほしい！
若い世代に刺激を与えるような、まちづくりへの関わり方とは？

【主な意見】

＜どんな事を人と共有できる？共有したい？＞

- ・近隣施設の連携（地域の高齢者，ライトハウス，佛教大学生）
- ・特に技術系の男性による家電製品等の修理再生プロジェクト
- ・サークル活動（読書会，カラオケ，写真，研究会，ゴルフなど）
- ・絵手紙や料理教室を気軽にに行ける場所（空き家や小学校）で開催
- ・当時の流行歌とともに，青春時代の思い出や恋愛の話などを語る。

【取組アイデア】

・「困りごと・人材発掘（家電製品修理・再生）プロジェクト」

おもちゃやイス，自転車の修理，電球の交換，野菜づくりをしてくれる人を発掘。イベント開催日に設定すると参加の機会づくりにも。電気屋さんに講師になってもらい，安く修理してもらう。人の得意分野を知り，マッチングさせるためにも，区役所や学区でよろず相談や人材募集をする。

・「空き家や小学校を使った講師チェンジ教室」

外へなかなか出ない男性をターゲットに，高齢者の男性による料理教室を開催。凝り性な人が多い男性がある程度できるようになると趣味に繋がっていきやすいそこを女性がうまく盛り上げて乗せていく。

また，年配の方はお料理の目分量を教え，若い人はスマホの使い方を教えるようにすれば，世代間での交流が実現。更に，作った料理に合わせてお酒を飲むようにすれば，男性同士が誘い合っでの参加も期待できる。取組を継続することが大切であり，「楽しい」ことが継続の秘訣。

3 災害に対して，安心できる地域にしたい！情報が行き渡る，高齢者にとって安心できる防災とは？

12月17日の共同部会で議論

(7) Gグループ 対象者：健康に不安を感じる高齢者（概ね75～100歳）

- 1 高齢になっても、安心して暮らしてほしい！多くの人と、顔の見える関係を育むには？

【主な意見】

＜あいさつ・声掛け＞

- ・あいさつ運動で横へのつながりを強化。アパート、マンションも巻き込む。
- ・老人会に入会していない人は、なかなか地域行事にも参加しない。そのような人は、老人福祉員としてこまめに訪問するが、心を開いてもらえるまでには時間がかかる。
- ・西賀茂地域は都市部とは違い虫送りなどの伝統行事が比較的残っている。伝統行事は、若い人でも参加する人が多く、地域住民の心の拠り所となっている。

＜場づくり・場の活用＞

- ・高齢者（70歳以上）を対象にしたオープンカフェの開設
- ・公園の活性化による孤立の防止。プランターを高齢者に渡して花づくりをしてもらい、それを公園に置けるようにする。花づくりは得意とする人も多く、生きがいになるのではないか。ヨーロッパではそれぞれの家が花壇を美しくしていたりする。日本でもそのようにできれば。
- ・長距離・長時間を歩くことは難しい。ちょっと行ったらすぐにちょいと休めるベンチ・椅子を設置する。
- ・配達や配送ではなく、昔のように魚屋さん、八百屋さんが大八車のように近くまでやってきてくれたら、そこを基点に交流が生まれる井戸端のようになるのでは。
- ・地藏盆への参加。興味がある学生を登用する仕組みを作ってはどうか。現状では人間関係で大学生が参加することはあっても、仕組みとしては確立されていない。

【取組アイデア】

・「気軽に集える「止まり木」」

一定間隔で座れるベンチを設置。各家庭や商店の前など。お茶が置いてありゆっくりできる。座った人には誰かが声を掛けることが習慣になるように。寄付又は行政の補助金で運営。場所の提供者を募集する。「このベンチの近くの避難所は」といった内容を掲示して、避難所の周知にも一役買ってもらう。気軽に出かけられ、多世代との交流が促進されるメリットがある。

- 2 災害に対して、安心できる地域にしたい！

情報が行き渡る、高齢者にとって安心できる防災とは？

【主な意見】

- ・防災は何よりも「向こう三軒両隣」の関係が大切。
- ・避難ルートを分かりやすく。
- ・大学生の参加を。避難訓練から若者の力を。

【取組アイデア】

- ・「伝統行事の継承で絆と防災力UP」

虫送り、地藏盆などの行事を活用した防災訓練、避難ルートの確認など。既存の、せつかくある機会をもっと活用し、京都ならではの強みとする。多世代が助け合う避難の理想形の実現、避難が難しい人の把握、対応方法の事前確認ができるなどのメリットも。行事の開催場所が避難所（小学校等）であることも多い。その機会に防災訓練をすることで、いざという時の行動をイメージしてもらいやすい。

(8) Jグループ 対象者：外国人

- 1 北区に移り住んだ外国人が地域の魅力を感じながら楽しく暮らしてほしい！
北区の良さを感じてもらい地域に馴染んでもらうしかけとは？

12月17日の共同部会で議論

- 2 外国人観光客に北区の魅力をもっと伝えたい！
特定の観光地にとどまらない、北区の魅力を届けるための取組とは？

【主な意見】

＜魅力の伝え方＞

- ・観光客ではなく、「地域に住む外国人」が外国人に地域の魅力を発信することが大事。老人施設の技能実習生などによりSNSで広がっていくのではないかな。
- ・外国人のニーズ把握が大事。興味を持てる内容であれば広げてくれる。

＜旅行者＞

- ・簡易宿泊所などが増え、意外な場所に外国人がいることも多い。アクセス、移動方法をグーグルマップなどで調べている。
- ・モノ消費よりコト消費の流れで、職業体験が人気になりつつある。

＜身軽に動ける拠点づくり＞

- ・公共交通、自転車の活用促進や荷物預かり所の増設による利便性の向上

【取組アイデア】

- ・長期滞在の観光客、地域に住む外国人に企業体験をしてもらい、口コミ等により観光客に向けて魅力を発信してもらう。
- ・在住外国人の交流場所（インターナショナルハウス等）で地域の魅力を情報提供。在住外国人はその魅力を外国向けに発信。技能実習生がフェイスブックで発信。国別によく見る観光サイトに口コミを掲載

- 3 北区に移り住んだ外国人に災害時での、自身の対応や支援者としての活躍につなげてほしい！そんな安心できる関係を育む取組とは？

【主な意見】

＜現状＞

- ・避難所に行けば「何でももらえる」との誤解がある。各自での備蓄の必要性などについて再周知が必要。

- ・避難所で観光客の受け入れは厳しい。別の受け入れ先を用意すべき。
- ・帰宅困難者用の情報を自主防災会にも提供する必要がある。

<日常のつながりづくり>

- ・町内会にこだわらず、災害時に協力してもらえるような関係性を日常のイベント等で作っておくことが重要だ。

<その他>

- ・他区のよい取組を北区でも取り入れる。
- ・スターバックスや新大宮ハロウィンなど、地域で外国人が集まりやすい場所がある。
そのような場で防災情報を周知してはどうか。
- ・町内会に入るメリットとは、と言われることもあるが、「防災」を切り口に加入を勧めるのは有効な手法ではないか。

【取組アイデア】

- ・様々な手段や機会を捉えて声掛けをする。
町内会に入ると防災情報を得られるメリットがあるということを「不動産屋」「学校」「職場」から知らせる。また、地域の外国人の集まる場（カフェ、新大宮ハロウィンなど）や子ども繋がりでの口コミで防災情報について周知する。

5 部会長のまとめ

(志藤教授)

- ・空き家の情報，地域活動の情報などの既にある情報の発信や交換，大学のボランティアセンターなどの既にある拠点同士のつながり作り，企業との連携，他区のよい取組を取り入れるなど，様々なアイデアが出た。

(藤野教授)

- ・50歳代以上の男性未婚率の上昇や子どもの減少，外国人の防災などの課題に対して，「地域の男性がつながれるような機会」「子どもの意見を聞く場」「4大学が集まる大学生フェスティバル」「地域における外国人ボランティアガイドの育成」などの意見が出た。その中で，外国人の防災についてはもう一段掘り下げて考えていく必要があると感じた。

(河角准教授)

- ・やってみたいことが同じ人と繋がる拠点や場は大切。そのために，今取り組んでいるものを少し変えてみるのも一つ。例えば，これまでの地藏盆のやり方を変えて，子どもが発表できる機会を作るなど。